東京学芸大学リポジトリ
Tokyo Gakugei University Repository

補習授業校における職員全体研修への取組

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2022-07-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 太田,和樹 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2309/00174297

補習授業校における職員全体研修への取組

前トロント補習授業校　教頭
尼崎市教育委員会事務局尼崎市立教育総合センター　研修担当指導員　太　田　和　樹

キーワード：職員研修，研究授業，言語活動の充実，表現活動の工夫

１．はじめに

本校に通う子ども達の教育を保障するために必要なことは何か。確かな学力を定着させるために必要なことは何か。それは，いかに現地採用教員の教師としての資質と指導力の向上を図るかである。

現地校採用教員並びに授業研究においていくつかの課題を掴んだ。現地採用教員の３分の１は教員免許を持たず，またカナダの生活が長い。そのため，各自が受けてきた教育以外は知らず最新の日本の教育を知る機会が少ない。また，現地の教育や文化的背景に少なからず感化されている。さらに，40日間で学習指導要領をすべて教えるため，全教員が一つの授業を参観する時間的な余裕がなく，新学習指導要の改訂により，補習授業校における言語活動の充実一つをとっても，その意識的な改善や指導力向上の共通理解を図るには創意工夫が必要であり，時間をかけて伝えていく必要がある。

本稿では，教員の指導力向上をいかに効率的に，効果的に図っていくかを職員全体研修の実践から紹介する。

２．在勤地の概要

カナダの公用語は，英語とフランス語である。だが，トロント（オンタリオ州）の公用語は英語である。トロントは1998年にトロント市を含む６つの市が合併して大きな市になり，GTA ～グレーター・トロント・エリアという名称も使われる。100人種以上の移住者が集まっており，世界一の多文化モザイク都市と呼ばれている。いろいろな言語がそれぞれのコミュニティーで使われ，言語と同様，文化や教育も継承され，価値観は様々である。このような価値観の中，自分たちの文化を大切にしつつも，他文化への理解を示す姿勢がカナダの教育の中で息づいており，それらの様相が相互扶助やボランティア活動の活性化に見られる。

３．カナダの教育

生徒が通う現地校の教育について，小学部１年～高等部３年生までアンケート調査を行った。また，現地校教員を本校に迎え，参観授業を見てもらい，日加の教育について質疑応答を行った。その内容から見られる現地校教育の特色を紹介したい。

(1) 教育委員会では，各学年の指導内容は決められているが，日本のような教科書はなく，各先生が個人的にテキストを用意して授業は進められる。

(2) 教材・教具や指導法は各教員の個人知的財産であり，それを他の教員へ教え合うことはない。（教員は毎年１年の契約制であり，指導力不足による解雇による教員の入れ替えは日常的である。そのため，他の教員よりも優れた実践を行う必要があり，他者へ情報提供はしない。）

(3) 学校全体で研究主題を提示し，全教員参加によるテーマの研修会はなく，教員間での指導法に関する交換もほとんどみられない。

(4) 小学校低学年より自分の考えを持ち，表現する力に重点が置かれ，ペア，グループでの話し合いによる問題解決学習など，他者との意見交換による授業が主である。

(5) オンタリオ州の教育評価の仕方は，日本の絶対評価のような客観性，妥当性などに重点をおいた数値による評価は少なく，スチューデントレポートという生徒の「よさ」を主にとした文章による主観的・抽象的な評価である。

4．トロント補習授業校の概要

本校は，昭和48年（1973年）に，トロント日本商工会がトロント日本語学校の分校として開室し，昭和49年（1974年）に文部科学省の承認を受けてトロント補習授業校として正式にスタートした。設置目的は「本校は海外に長期在留した後，本邦に帰国する海外勤務者等の子女に対し，帰国してから適応できる学力の維持，増進を図るために，日本語による教育をすることを主たる目的とする。」である。現在では「自ら考え行動する，心豊かで調和のとれた国際性豊かな児童生徒の育成を図る。」という学校教育目標のもと，4 歳児から高 3 年までの園児，児童，生徒を対象とし，現地校（マクマリック小学校，ウイノナドライブ中学校）校舎を借用して毎週土曜日に一日の教育活動を運営している。

5．本校の職員研修の課題とその解決法について

(1) 本校の課題

①教員の課題

・3 分の 1 の教員は，教員免許を持っていない。また，1 , 2 年で入れ替わる新任教員もおれば30年近くも勤務する教員もおり，経験年数の二極化が見られる。

・カナダでの生活が長く，日本で受けてきた当時の教育観で指導を行い，教科書に書かれた知識のみを一方的に教え，子ども達の思考力，判断力，表現力を養う視点に乏しい。

②研修の課題

・学校全体で共通に研究すべき研究主題がなく指導の方向性が曖昧であり，基礎基本の定着に終始している。

・各教科における指導法や日本の最新の教育情報を得るための研修が少ない。

③組織の課題

・授業研究や全体研修の時間が確保しにくい。新しい指導法の習得への意欲はあるが，その保障が難しい。

・授業時数に制約があり，教員間における参観の時間確保が困難である。

(2) 本校の課題解決のための研修体制

本校の研究体制は，課題研修，授業研究会，職員全体研修と大きく 3 つの研修会が放課後に行われる。今回は③の職員全体研修について実践の説明をする。

①課題研修は，教員としての資質や具体的な教授法，最新の教育事情，先週における各実践の評価や改善など，校長が全教員に説明をする。毎週 1 回15分間の講話を行う。

②授業研究会は，4 ～ 6 人の小グループで話し合い，1 年に一人のペースで授業者を決め，公開研究授業を行い，グループ内で参観を通して授業実践の反省を行う。毎月 1 回（約10回）30分の検討会を行う。

③職員全体研修会は，全職員が一同に介し，時間を共有しながら授業実践を検討する。年 3 回45分の検討会を行う。

(3) 職員全体研修会からの課題解決に向けて

今回は，3 つの研究会があるなかの「職員全体研修会」を取り上げ，課題解決の実際と，その分析と考察を図っていく。そこで，2 つの柱を設定して実践した。

①平成22年度，本校が開校以来，初めて研究主題を設定した。「基礎的な知識・技能を活用する能力を高めた子

どもの育成」を主題,「言語活動の充実と表現活動の工夫を通して」を副主題とし，言語活動の充実に重点を置いて取り組みを進める。

②全教員には，具体的な指導法を体験的に捕らえさせるために，全体研修の時間を年間 3 回設定し，教員を生徒にして模擬授業を展開する。

６．全体職員研修での実践から

(1) 実践報告Ⅰ（模擬授業Ⅰ：小６国語　俳句　45分）

① ねらい（課題解決に向けて，次のようなねらいを設定して実践する。）

ア 言語活動の充実のため表現活動ⅠとⅡを設定し，その指導法を習得する。

イ 表現活動Ⅰは導入の発問を二者択一問題で提示し，〇か×で考えさせることで自分の考えをつかませる。

ウ 表現活動Ⅱは発展的な発問を提示し，グループでの話し合い（以下，グループ学習）を通し他者の考えを聞くことで個人の考え深めさせる。

② 教員の反応

ア 成果

（ア） 発問では，二者択一問題で答えさせノートに書かせることで，子ども全員に自分の考えを持たせることができると理解できた。

（イ） グループ学習で活発な意見交流が生まれ，考えが深まることが分かった。

（ウ） 公開研究授業ではどの部会も表現活動ⅠとⅡを導入した授業を展開した。

（エ） 平素の授業においても積極的に取り組む教員が３，４名見られはじめた。

イ 課題

（ア） 表現活動ⅠとⅡのねらいと指導法を理解出来ず，授業でどのように導入したらよいのかよく分からない，45分間の授業に表現活動ⅠとⅡをセットで取り入れなければならないと思い込み，時間的に無理だと尻込みする。

（イ） 40日間で基礎・基本の徹底を図るためには，一斉授業による指導法で教え込むことが効率的だと思い込み，グループ学習を導入する時間がないと捉える。

（ウ） 小学部低学年では，グループ学習による話し合い活動ができないと主張する。

(2) 実践報告Ⅱ（模擬授業Ⅱ：中学３理科　新エネルギー　45分）

① ねらい（実践報告Ⅰの課題解決から，次のようなねらいを設定して実践する。）

ア 興味のある話題を取り上げ，表現活動１（発問１，個人）と表現活動２（発問 ２，グループ）を活性化できるような展開を図る。

イ グループ内で効率よく全員が発表し，グループの意見をまとめ，発表できるよう，活動の手順を書いた「司会者カード」を配付し活用させる。

ウ グループの考えを「ラミネートシート【小型のホワイトボード】」に記載させることで，発表内容を全員が見ることが出来，比較検討ができるようにする。

エ ラミネートシートの活用で，各グループ発表内容を評価することができる。（最も取り組みが優れているグループ，また内容が具体的であり有効なグループを紹介する。）

② 教員の反応（アンケート結果　回答者３２名）

評価内容	とても	だいたい	あまり	ほとんど
１．発問 1 と 2 の関係はわかりましたか。	5	18	8	1
	15.6％	56.3％	25.0％	3.1％
２．表現活動Ⅰの方法がわかりましたか。	14	15	2	1
	43.8％	46.9％	6.3％	3.1％
３．表現活動Ⅱの方法がわかりましたか。	9	16	6	1
	28.1％	50.0％	18.8％	3.1％
４．今までの知識や資料を活用することができましたか。	6	16	9	1
	18.8％	50.0％	28.1％	3.1％
５．学習形態の大切さはわかりましたか。	16	15	1	0
	50.0％	46.9％	3.1％	0.0％
６．各グループを最後に評価する意味は分かりましたか。	9	13	10	0
	28.1％	40.6％	31.3％	0.0％

ア　成果

（ア）　表現活動Ⅰでは，原子力発電という関心の高い時事問題を取り上げ，2 者択一の疑問を提示したことで，展開方法の理解は90.6 ％，ほとんどが理解できた。また，表現活動Ⅱでも，グループでの話し合い活動を通すことで，段階的に思考が深まり約71.9％が理解できた。

（イ）　表現活動Ⅱでは，今までの知識を活用し，グループ活動による思考の深まりを68.8％が理解できた。しかし，これは課題としてもとらえられる。

（ウ）　表現活動Ⅱで，司会進行カードを配付したことで，効率的なグループ活動ができ，必ず全員が一言でも発表させるようし向けることができた。

（エ）　個別，グループと，机や椅子の向きをその都度移動させるなど，適宜，学習形態を明確に変化させることが大切であると96.9％が回答している。

（オ）　各グループを具体的にA ～ Cで数値化して評価することで，より深く話し合うための真剣な姿勢を意図的に促すことができると体験的に68.9％が理解した。

イ　課題

（ア）　原子力発電の是非を問うテーマは非常に課題が難しく，また今回のテーマがどの学年の設定であるかも曖昧であったため，表現活動Ⅱでさらに深く議論することができなかった。また，発問の仕方にも課題を残した。

（イ）　各グループの評価で，真剣に考えているのに最低評価Cを付けることに難色を示す教員が31.3 ％いた。グループ評価の基準を前もって説明し，明確にする必要があった。

（ウ）　公開研究授業や通常の授業で，言語活動の充実に向けてグループ活動を積極的に取り入れた授業が見られるようになってきたが，グループでの話し合いがお互いの意見を聞くだけに留まり，思考を深化させる発展的な話し合いにはなっていなかった。

(3) 実践報告Ⅲ（模擬授業Ⅰ：生徒指導　いじめ対応　45分）

①　ねらい（実践報告Ⅱの課題から次のようなねらいを設定して実践した。）

ア　具体的に考えることができるよう身近なテーマを設定する。

イ　指導内容を時系列で書くよう指示し，発問の解答方法を統一することで話し合いの方向性がそれないよう工夫する。

ウ　１対１の対話を重視し，グループ学習の前にペア学習を意図的に取り入れる。

エ　グループ学習での評価の基準を前もって説明し，それに沿って話し合わせ，評価する。

②　教員の反応（授業後のアンケート調査より）

ア　成果

（ア）　話し合いの時間が足りなかった先生（32人中27人）が多かったが，見方を変えるとそれだけ話し合いが盛り上がったといえる。

（例）「様々な意見が聞けて，納得できる意見が多かった。楽しかった。」

（イ）　ペア学習があると，個別（１人），ペア（２人），グループ（４人）と段階的に話し合うことができ，比較的意見が言いやすく，グループでの活発な話し合いが生まれた（32人中４人）。

（例）「ペア→グループの形はいい。」「ペア学習があると，全員の意見を出せる。」

（ウ）　他者の意見を聞くことで同じ考えや異なる考えを知ることができたことは有意義であった（32人中27人）と述べ，考えが同じであったときは相手に親近感を持つとともに自分の考えに自信が持てたと回答している。また，異なる考えに触れることで，気づくことも多く，新しい視点の発見につながったという評価がでてきた。

（例）「自分と同じ考えのところがあると確認できてよかった。」「自分だけでは考え付かない事を聞くことができた。」

イ　課題

（ア）　最も多かったのが，グループ学習での時間不足である（32人中27人）。如何に配時を考えた話し合いをさせるかが必要である。

（イ）　各グループでの発表の内容を簡潔に答えることが難しかった。短時間で的を射た発表が如何に難しかを体得したようである。従って，発表の仕方も指導する必要がある。

７．本校教員の変容（言語活動の充実，特にグループ学習への意識や実践について）

(1) 実践報告Ⅲのアンケート調査より

①　グループ活動は他者の意見を聞くことで，各人の考えを深め，意見を確立するのに効果的である。

②　話し合いの中から，問題点や解決案が浮かび上がってくるので有効である。

(2) 授業研究会の本年度のまとめより

①「昨年度と比較し，グループ活動を導入することができたかどうか」を各研究部会で４段評価を行い，平均すると評価3.5であった。

②　各研究部会の来年度への取り組みの記述より，研究部会では，グループ学習への前向きな姿勢が100％見られた。

ア　テーブルごとでグループ活動を取り入れていきたい。（幼稚部研究部会）

イ　４月にグループ学習を含めた年間計画を立てておく。今年度の研究授業を生かし，表現活動２を取り入れた効果的な指導を試みる。個人，ペア，グループ学習をどの単元にどのように組み入れるか研究を重ねる。（小学部１～３年研究部会）

ウ　司会者カードを上手に利用したい。（小学部４～６年研究部会）

エ　グループ活動を，どの課題で取り入れるか，時間配分について計画する必要がある。ペア学習からグループ学習へ，段階を経て変えていく。（生活・理科・社会科研究部会）

オ　安心してどんな意見でも言い合える（出せる）環境が必要。（生徒間，教師との関係，リーダーが各班にいるなど）学級経営ができていて効果ある活動である。（中学・高等部国語研究部会）

カ　グループ発表を解法表現で指導し，教え合い（互いの解法の説明など）としての機会を増やす。また，クラスの雰囲気作りを担任と連携し，活動に結び付けられるようにする。（中学・高等部数学研究部会）

8．まとめ

カナダの教育現場と同様，以前は，各研究部会が独自の研究を行い，各学年の連携がほとんど見られなかった。しかし，今回，一つの研究主題を設定し，「言語活動の充実」を合い言葉に，職員全体研修会を実践するなかで，幼小連携，小中連携，中高連携が見られ，初めて本校の教育の方向性が明確になり，各教員が具体的な目標を持つことができ，学校教育全体が活性化してきた。また，職員全体研修会で全教員を生徒にした模擬授業は生徒の視点に立つことができ，ペア学習やグループ学習などの成果を体験する中で基礎・基本の徹底は一方的に教え込むことによってのみ可能であると思い込んでいる教員へ，大きな意識変革となった。

このことから本研修会の実践は，教員の意識改革と授業改善に大きく結びつき，言語活動の充実，特にグループ学習に関しての具体的な実践方法を学ぶことができたといえる。さらに，グループ内で各自の意見を交換することはお互いの考えを深める機会となり，教員間の結束力も高まり，良好な人間関係をも生みした。

今回の職員全体研修を通して，一番の成果は，活発な意見交換をする生き生きとした子ども達の笑顔や姿が教室のあちこちで見られるようになったことである。